

染香

ぜんこう

福 泉 寺 寺 報
令和7年3月
第 131 号
毎月 1 日発行

ホームページ



おて LINE



子ども行事



「正しさ」のありか

昨年（しねん）の過熱した選挙関連の報道に際して、脳科学者の中野信子さんがしたコメントが衝撃的でした。

「人間の脳には『真偽』を判断する領域はない」

ウソかホントか、見分けられる能力がないのだ、と。では、私たちは実際にどのように判断しているのかというと、一つはその人の容姿や声の出し方、表情。または、自分との利害関係（自分にとって損か得か）。両者とも、真偽とは全く無関係の情報が判断の基準になっているのだそうです。

容姿でいえば、中野先生いわく「子どもを集めてきて、きれいなお姉さんが言ってることと、そうでないお姉さんが言ってること』『どっちが正しい？』って聞くと、美しいお姉さんを選んだりするんです」と。

利害でいえば『友引』の日に葬儀を避ける』ことです。これは、知っている人もいると思いますが、室町時代に伝来した中国の占いで、「友引とは、物事に勝負がつかない日」と明記されているにもかかわらず、「友を死の世界へ引っ張る日」という語呂遊びが「社会の常識」となり、これを避けます。「常識＝正しい」とは限らない好例です。

このような「正しい」とされる判断が拡大、膨張していくと、親子げんか、夫婦げんか、町内不和、…戦争、となっていくのです。言い換えれば、互いの「正しさ」の衝突。こうなってしまうと、もはや「正しいかどうか」はどうでもよく、自分にとって得か損かだけしか残ってゆきません。

アインシュタインも「常識とは、18歳までに集めた偏見のコレクションである」と言っているように、やはり残念ながら、人間には真偽を判断する能力はないようです。

見方を変えれば、もしかすると、人間の世界に正しいことと、正しくないことというのは、無いかもしれません。そんなものは元々無いから、判断する能力は不要であり、我々の脳には備わっていない、というのが中野先生の見解です。

さて仏教では「平等」を説きます。容姿、損得には優劣や善悪はないのだ、と言います。もし、生活の中で、むずかしい人間関係に出会ったならば、「ナンマンダブツ」と称えながら、この話を思い出してみようと思います。

もしかしたら、大事なものは、正しいかどうかではなく、「楽しいかどうか」ではないかと…いやきつと、そうですね！

（住職）

イマサラ仏教！！



そもそも【お経を読む】とは

「お経は亡くなった人へのごちそう」であるとか、「故人の供養としてのお経」と聞けば、しっくりくる人は多いでしょう。逆に、子や孫が誕生した時、仏間に駆け込んでお経をあげる人がどれだけいるでしょうか。

でもお経の内容は「いつ死ぬかわかりません」「そして必ず死にます」「財産があれば幸せと思う人へ。あったらあったで憂うものですよ」みたいなものばかりです。だから、聖徳太子は仏教を国づくりの柱にしたのです。あらゆる宗派において太子は「和国の教主（日本のお釈迦様）」と言われるのはそのゆえんです。

屁理屈を加えるなら「『故人の供養』をせずにいられない私の心に寄り添ってくれるもの」でしょう。

ちよっと あたまの こりほぐし

たかし君は、満開の桜の木の下、
さとみさんに告白をしましたが、フラれました。

諦めきれずに、今度は杉の木の下で…。

すると、返事はオッケーでした！

どうしてでしょうか？



おてらより

春の永代経・彼岸法要

日時：三月二十日（木）十四時～十六時
講師：川田信五 師

（東かがわ市 大信寺住職）

・みやすいお話で大好評です
住職ゆかりの「五平餅」を振るまいます。
お気軽にご参拝ください。



『おとなの寺子屋』スタート

仏教の基礎中の基礎を学ぶ会「法味会（ほうみかい）」を始めます。
「今さらこんなコト聞けない」と臆することはありません。安心してください。
一番大事なところを、一番シンプルにお伝えできるように頑張ります！
参加ご希望はお寺まで

- ・毎月第2日曜午後1時半～3時半
- ・はじめに『正信偈』をします
- ・会費無料
- ・お茶を飲みながら気楽に行きます。
- ・少人数で進めます。

によぜがもん
「如是我聞」の意味

― 中国人学生から教えられたこと ―

矢幡 和男

『如是我聞（かくのごとくわれきけり）』は『阿弥陀経』の最初の一句です。「私はこの様にお釈迦様の説法を聞きました」という意味です。

『阿弥陀経』の梵文経典の題名は「スカヴァ ティー・ヴューハ」で、日本語訳すれば「スカヴァ ティー」は「幸あるところ・幸福の国・浄福の世界」という意味で、これを中国で「極楽」あんらくこく「安楽国」と訳したのです。「ヴューハ」は「素晴らしく見事な景観」という意味です。しかし、この経典の題名を『阿弥陀経』と訳したのは、『無量寿経』も同じ題名だったからです。二つとも同じ題名のお経だったので、片方を『阿弥陀経』、もう片方を『無量寿経』と名付けられました。

お釈迦さまは、お経を一人ひとりの心の目覚めを促すために説かれました。それは『阿弥陀経』の終りには、「われ一切の世間のためにこの難信なんしんの法ほうを説とけり」とあり、また、「もろもろの善男子、善女人にして、もし

（この経を）信ずることあらん者は、まさに発願ほつがんして彼の国土こくどに生しょうずべし」と説いてあります。だから、このお経は一切世間のすべての人々に説かれたお経であり、生きとし生けるものの往生の道を説き明かされた経典であるということがわかります。したがって、このお経をいくら読んだり聞いたりしても、そこに何が説かれているか、その意味がわからなければ何にもなりません。大事なことは、ほかならぬわたし自身のために説かれたお経なんだということです。どのお経でも皆そうですが、そこに何が書いてあるのか、わたし自身がそれをどう受けとめるのか、という問題が大切なのです。



もう十年以上も前のことになりましたが、中国から近畿大学の経済学部へ留学している若い方と話す機会がありました。その方（仏教を知らない方）と中国と日本の違いなどを話したのですが、その時たまたま宗教の話になりました。中国は漢字の国ですので、話すより書いた方が分かりやすいという事で、隣にいた住職さんがこの『阿弥陀経』の経文を紙に書かれました。それを見た中国人の方は

「よく分かる」とおっしゃいました。そしてこの「如是我聞」という言葉は「わたしの心の中に新しい世界が生まれて来ました、という意味ですね」とおっしゃったのです。「このようにお釈迦様の説法を聞きました」と訳されるものだ、とそこにいた全員が思っていたものですし、そんな訳があることを知らなかったのでみんなびっくりしたのでした。わたしは「なぜそういう訳になるのですか」と聞くと、その方は「もう中国では漢字の意味の分かる方は少なくなりましたが、『聞』は心にきこえてきたことをあらわす字なので、聞いたことによつて心が新しく新鮮に開かれてきたと訳すのです。」とおっしゃいました。お経の始めに、常にこの字が使われているのは、昔のインド語（サンスクリット語）から中国語に訳すときに、『聞』という字を使ってこのことを表現されたのでしょう。（サンスクリット語から直訳した方は『私の心の闇が、光によつて解き放された』と訳します、と教えていただきました。また、現在も他の中国人の方にこの話をすると同様のことを言われ、『聴』は耳に入ってきただけの意味だと教えてくれます）



『聞』という字を使って表したかったことは「仏様の光によつて、私の心の闇が明るく解き放されること」なのです。昔聞いた言葉で「聴聞の聴は耳できく。聞は心できく。」ということですよ。お経を読むということは、それによつて心が開かれていくことなのです。

『観無量寿経』の「心眼障りなくして、はるかに世尊せそんを見たてまつりて」とは同様に「心の闇が開かれて仏様に出会えた」という意味なのでしよう。よつて毎日の読経で『私の心の闇が、仏様の光によつて解き放されました』と言えるように心して読まなければ、と思いました。

文化革命によつて、中国本土では現在漢字の意味が不明になってきていますが、台湾では漢字の意味を守り続ける教育が今も続いています。

（初出『朋友』東本願寺大阪別院）
（傍線、太線は住職付す）

